

どう見る？ 子どもの行動

子どもたちが日々見せてくれるさまざまな行動について、発達上の理解と援助という観点から解説します。

園内研修 保護者への情報提供にご活用ください。

今回のテーマ

うそ

うそをつかなくても 解決できる方法を伝える

お母さん、毎日残さないで食べてるよ！

4歳・春

4歳児クラスの担任は、あるとき、クラスのごみ箱に毎日のお弁当の残りが捨てられていることに気づきました。よく観察すると、食事が始まった

直後、レイナがごみ箱に近づいています。以前、レイナの母親は「毎日お弁当残さず食べてるよ」と言ってくれてうれしい」と担任に話していたのですが…。



こうした子どもの行動の意味を、どう見ますか？

発達に
とっての
意味は？

現実のうそをつくのは 知的な発達の証拠

子どものうそは、大きく二つに分けることができます。まず、空想のうそで、これは「こうだったらいいな」という子どもの願望がそのまま言葉になって出てきたものです。3歳児では空想と現実が入り交じったようなうそが多く、本人もうそだという自覚がありません。もうひとつは、現実のうそで、自分にとって都合が悪い状況になったときに自分を守ろうとしたり、誰かに責任を転嫁しようとしていたりして、発せられるものです。周囲の状況と自分の立場がある程度わかるようになる5歳くらいから、こうした現実のうそが見られるようになります。つまり、自分に都合のよいうそ、相手を困らせるうそをつくということは、物事の見通しがもて、因果関係がわかるようになったから、とも言えるのです。



大人の
サポートは？

うそをつかなくても 問題は解決できることを知らせる

非現実的な体験を語るような空想のうそには、目くらまを立てる必要はありません。4歳ごろまでは子どもは時間の経過を把握できないため、だいふ前の出来事を「昨日」「明日」と説明することもしばしばです。訂正しようとしても「本当」と言い張ることもあります。成長とともになくなるうそで、決して虚言癖などではありませんので、「旅行に行ったんだね。楽しかったんだね」などと楽しかった内容（本人が一番訴えたいこと）に話題をもっていくとよいでしょう。

5歳児ごろからの現実のうそに対しては、まず「うそはいけないこと」を納得できるように説明します。「困る」「悲しくなる」など、そのうそによって誰がどんな思いをするのかを話し、自分が同じ立場になったらどうかを一緒に考えます。「うそはダメ！」

のひと言で終わらせないことが大切です。

また、本人がうそをつかざるを得なくなった状況を聞き、そのときの気持ちに共感を示した上で、「うそをつかなくて、状況を改善するにはどうすればいいか」を一緒に考えましょう。うそをつくことは自分も相手も嫌な気持ちになるし、うそをつかなくても解決の方法は必ず見つかる…そう考えられるように子どもの気持ちを支えらるとよいでしょう。

